

第68回火山噴火予知連絡会議事録

日 時：平成7年2月6日(月) 13時00分～17時05分

場 所：気象庁 第1会議室

出席者：会 長：井田

委 員：茂木、荒牧、浜口、野津、藤井(敏)、渡辺、歌田、鍵山、平林、藤井(直)、中川、曾屋、多田、大島、熊谷、鈴置、栗原、宝来、手塚、石井

臨時委員：石原(京大・桜島)、中田(震研)、清水(九大・島原)、松田(阿蘇山測)、

オブザーバ：西村(北大)、小白井・沼川(地理院)、古川(水路部)、福井(気研)、小嶋(地磁気)、
福田・長谷川(札管)、竹中(仙管)、神林・五味(東管)、中辻・鯉川(福管)、内池・中礼・山本・吉田(気象庁)

事務局(庶務)：濱田、西出、立山、齊藤、西脇、土井、北川、中村、久保、高木

○議事に先立ち栗原委員から委員の異動、欠席、臨事委員の紹介があった。

1. 幹事会の報告

2. 前回議事録の承認

3. 火山活動の報告と評価

1) 雲仙岳

- ・94年10月から表面活動のレベルは低い状態。地震発生と傾斜変動の周期的変化は、周期が伸びながら継続。火砕流も小規模で頻度も減少。赤外写真で、山頂部は依然として高温であるが、裾野は規模が縮小。地磁気の全磁力変化が最近減少。地下の熱消磁によるものか、ドームの帯磁によるか原因は不明。
- ・ドームの隆起部分は西側隆起部の中心からやや東寄り、崩落が北東・南東方向へ起きている。震源分布は、大きく変わっていないが、ドーム隆起部の直下の旧地表面から100～200mと見られる。数は少ないが12月からやや大きな地震が発生し、現地で有感となる地震が発生。
- ・光波測量で、10月から北も南もほとんど変化なし。眉山変化なし。
- ・溶岩噴出量の時間変化は、大きく見ると2回の山がある(92年の終わりから93年の始めに1つの波が終わり、次の波が始まって現在小さくなってきている)。
- ・空中写真から求めた地形変化量で、最高点の位置は旧地獄跡火口の中心。火砕流に伴う微動のエネルギーから求めた火砕流の堆積物の積算値は、1億9千万 m^3 を超えてからほとんど変化なし。94年の1月から12月までの総堆積量は約400万 m^3 で、1日当たり1.1万 m^3 と低成長。
- ・溶岩の結晶の斑晶量の時間変化は噴火の当初から見ると量が増加。苦鉄質鉱物の量は減少。最新のデータでは細かい結晶についてはより低温で組成するものがでてきている。
- ・昨年11月末の SO_2 の放出量は1日当たり18tと今までで一番少ない。
- ・GPSデータは特に変化なし。潮位も大きな変化なし。

これらの報告結果に基づき、統一見解をまとめた。

2) 阿蘇山

- ・有感になる特殊な微動をしばしば観測、土砂噴出も観測。
- ・伸縮計は特に変化なし。傾斜計は12月終わり頃から方向が若干変化(火口方向が上がるような変化)。地磁気観測結果から判断すると熱の供給と放散がバランスしている。火山活動としては、土砂噴出などの表面活動は、やや活発化することを含みつつ、しばらくはこのまま推移すると思われる。今後湯溜りの減少と共に火口底が露出し、火

孔の開口・火山灰の噴出の可能性があり注意が必要と考えている。

3) 雌阿寒岳

北海道東方沖地震後に地震回数一時増加。

4) 有珠山

地震活動は少ない状態だが、兵庫県南部地震の直前にかなり小さい地震が3日間に40個観測。これらは麓の温泉街の直下の約5 kmのところが決まる。有珠山の場合は山腹の珍しい地震は今後注意する必要がある。周辺の井戸の水温の変化は温度が下がり傾向であったものが、僅かであるが初めて上昇傾向に転じた。

5) 樽前山

地震回数は少ないが、三陸はるか沖地震の2日くらい前から群発地震があった。

6) 十勝岳

地震活動は低いレベル。最近は見られなかった62-1火口から、100 m位噴煙が上がった。ただし、火山性地震や微動の変化は観測されていない。十勝岳の東側20 km位のところの丸山の南東10 kmで1月28日から最大M 2.8の群発があったが、短時間でおさまる。

7) 十和田

湖南の休屋の直下10 kmで12月28日三陸はるか沖地震の後群発。震源に近いので影響を受けたと解釈出来るのではないと思われる。過去にも同じような場所で群発。

8) 岩手山

94年10月の北海道東方沖地震で北側で少し大きめの地震(M 4.1)。

9) 秋田駒ヶ岳

北方で北海道東方沖地震の直後に地震が28個観測された(最大M 3.7)。

10) 栗駒山

94年11月南側で地震(最大M 2.7)。

11) 蔵王

北海道東方沖地震の直後に、従来地震のないところで32個発生。

12) 那須岳

北方20 kmで94年12月18日にM 5.1の地震が発生。

13) 新潟焼山

噴煙は4～5年前の活動な頃に比べれば低い状態。

14) 草津白根山

地震回数が少ない状態継続。火山ガス、温度、化学組成、湯釜の水温、水位等に特に変化なし。

15) 浅間山

基本的には低いレベル。有感地震が94年11月頃山頂直下3 kmで発生。噴煙量が若干増えて、火口の活動がやや高まっている。水準測量では山頂上がりに転じた。

16) 箱根山

カルデラの中で94年11月、12月に群発地震。

17) 富士山

震源分布でみると不活発な状態。

18) 伊豆東部火山群

94年11月に大島との間で地震活動(最大M 3.7)。傾斜計等は異常なし。光波観測では特になし。伊東の水位、水温の観測と大島のヘリウムの観測については、特に異常なし。初島-伊東のGPSと小室山-宇佐美のEDM、GPSがやや延び加減か。EDMはほとんど変化なし。基線変化で初島-伊東ではやや延びの傾向(数mm程度)。他は異常なし。潮位記録からはここ1年間伊東の隆起が停滞気味。

19) 伊豆大島

地震活動は低い状態。カルデラ周辺で小さな地震が時々発生。山頂直下でコーダ部分が低周波の地震発生。火口温度は変化なし。地磁気は消磁傾向が鈍化しながら継続。傾斜は特に異常なし。

20) 新島・神津島・三宅島

時々小さい地震活動。御蔵島南の群発地震は、11月でおさまる。新島―神津島と神津島―三宅島の比高から神津島が上がり気味。新島・神津島は、大島と差木地の間で一方的に縮んでいるのに、新島―神津島は逆に一方的に延びている。結果から神津島の観測点がほぼ南南西に動いているものと考えられる。三宅島は、三宅―伊豆で若干距離が伸びて、比高では伊豆が上がるセンス。

21) 南方諸島

特になし。

22) 桜島

94年後半から爆発回数が増加。降下火山灰量、94年夏から30万から50万t/月と多くなっている。A型及びB型地震の発生は火口直下のみ。94年12月頃から山麓の7合目まで噴石を飛ばす爆発活動をしていることから今後は注意。噴石を飛ばすような活動をするとき火口底で溶岩が溜って来るので、空中からの火口観測を今後定期的に行うことが必要となって来ると思われる。地磁気では、特に異常は見られない。

23) 霧島山

地震回数は少ない状態。一昨年新燃岳の火口の北で熱消磁があったことが判明。

24) 諏訪之瀬島

毎月噴火が認められ、最近降灰も多く、活動は活発。

25) その他

- ・ニイラゴンゴの火山活動について東北大から報告。

4. 委員の任期について

- ・事務局から3月で1期2年間の任期が切れることの説明と次回(5月)の連絡会までの体制の協力依頼を行った。

5. 連絡事項(震研より)

- ・地震研究所共同利用研究集会で「雲仙岳の噴火から火山学は何を学ぶか」の講演会開催のお知らせ。

6. その他

- ・連絡会終了後、気象庁記者会見室において井田会長・濱田火山対策室長・中田臨時委員・清水臨時委員が記者会見を行い、雲仙岳の火山活動に関する統一見解の発表及び全国の火山活動状況について説明した。